国語A

（90分）

注意　解答はすべて解答用紙に記入すること

第一問

次の文章は、千葉雅也著『勉強の哲学』の増補版で書き下ろされた「補章」の一節である。これを読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、表記の一部を改めた）。（60点）

1

まず、アイロニー、ユーモアという二つの軸について復習しましょう。

アイロニーとは、この本では、既存の価値観を疑うということでした。何かある事柄について、これは不道徳だとか、これはうちの会社にはふさわしくないといった判断がされるときに、本当にそうだろうかと疑い、根拠は何なのかを問う。

そして、そう疑問を向けたのに対し、相手が何かひとつの根拠を挙げてきたら、さらにその「根拠の根拠」を問うことができるわけです。すると、さらに「根拠の根拠の根拠」を問う……というように、どんどん根拠づけは無限退行するので、結局は、どんな価値観も究極の根拠を持たないということになる。そのように、実はありとあらゆる価値観は、本当だったら無限退行してしまいかねないのだけど、その根拠づけをどこかで強制的にストップして、無理やり非合理的に押しつけることで成立しているわけです。

このように、価値観の本質的な無根拠性をアバいてしまうのがアイロニー[1]ですが、それを徹底したら、結局いかなる価値観も採用できなくなってしまう。[A]アイロニーの過剰は、何も信じられないという事態に行き着きます。

そこで、アイロニーの無限退行を、あるところでユーモアによって中断することが必要だとこの本では説明しました。

アイロニーをタテ方向のものとして、根拠を深掘りしていくイメージで捉えるなら、ヨコ方向に行くのがユーモアです。すなわち、ある価値観に対して別の見方をしてみたらどうなるか、と別の価値観を提示してヨコへズレるのがユーモアなのでした。タテに掘るのはサイゲン[2]がないので、ある程度タテに掘り下げると同時に横にズレてみよう、というわけです。

さて、ではこのアイロニーとユーモアを、実生活に応用するとどうなるか。

たとえば、女性はこうあるべきだとか、管理職ならこう考えるべきだとか、人は何らかの価値観ないし規範から人を判断していて、日常はそういう価値判断の連続です。

そこでアイロニーをかけて、本当にその判断は正しいのかと考えてみる。会社で、この業務を担当する者はこうふるまうべきだ、と思っていたけれども、いや本当にそうだろうかと疑ってみる。価値判断を一時停止する。そこで、ユーモア的に別の見方をしようとする。……すると、だんだん、ある特定の価値観のもとでの判断ではなくて、ただ目の前で起きている出来事をそのまま見て受けとめるという感じになっていくでしょう。

目の前で起きている出来事、人の言動の良し悪しを即断できなくなる。判断が宙づりになる。朝、会社で上司が私に言ったことを、アドバイスとして受け取る価値観もあれば、皮肉として受け取る価値観もあるし、冗談だと捉える価値観もあるかもしれない。そのように、B さまざまなフィルターをユーモア的に並列させる練習をすれば、人から言われたことの解釈はひと通りではなく、いろいろだと考えることができるようになる。

そうすると、多様な解釈のいわば「交差点」としての、ただ言われたこと、ただ起こっている出来事に向き合うことができるようになる。言われた文字通りの言葉、そのトーン、リズム、身ぶり。それだけ。誰かが、音として言葉を発し、脚を動かして去って行く——野生の動物のように。あなたはその出来事に、自然を観察するみたいに立ち会っている。

2

ここで芸術のジャンルをひとつ出すならば、僕は小説というのは、そういうことだと思うのです。小説的に世界を捉える。特定の価値観から「裁く」ような発想で世界を見るのではなく、小説では、人のやることは両義的、多義的であると考えて、解釈の交差点としての「ただの出来事」を記述している。

恋人からの言葉は、愛の言葉であると同時に、そこには何か自分を責めるようなものが含まれているかもしれない。どんな言葉にも出来事にも、自分にとってプラスとマイナスがどちらも含まれている。そこで、プラス、マイナスどちらかに決めつけようとするのではなく、両義性あるいは多義性の状態を許容する——なかなかそれに「耐える」ことができない人もいるかもしれません——のが文学的態度だと言えると思います。

というかおそらく、この感覚がわからないと小説、とくに純文学というものがわからないと思うんです。エンターテインメ

ント小説ならば、人のふるまいや出来事の意味を単純化することで成立しているところがあると思いますが、純文学では両義性や多義性が重視されていて、出来事をありのままの複雑さで――一方的に価値づけするような表現を避けて――書こうとします。

まず『勉強の哲学』の応用としては、アイロニーによる価値の宙づり、ユーモアによる価値観の並列化をやってみると、人間観察が面白くなるという効果があるはずです。

毎回はうまくいかないと思いますが、嫌いな人の言動にもチョクジョウテキ[3]に反応せずに、いったん受け流すことができるようになるかもしれない。ああ、この人はこういう人なんだ、しょうがないな、とちょっとクールに眺めて距離を取るわけです。

そこでぜひ試してもらいたいのは、自分の日常に起きた出来事を、ただ起こったままに書いてみるということです。アイロニー、ユーモアの眼鏡を通して見えてくるただの出来事としての日常を、ただただ書いてみる。人に言われたことに対して何かこじれた感情を持っていても、テープ起こしのように、それをただの「セリフ」として書いてみる。ただ起こったことを起こったように日記にしてみる。

できるだけ無表情に、無個性に出来事を書くように努める。それが、逆説的かもしれませんが、オリジナルな小説世界を立ち上げるためのひとつの方法だと思います。がんばって自己表現しようとしない。起きたことをただ書くのですが、「ただ書く」というのは実は不可能で、要素の取捨選択が無意識に働くし、書き方のリズムには身体的なクセが出ます。そういうひじょうに身体に近いところで生じるクセが、文章の本質的なオリジナリティだと思います。文章に対するこういう身体的なアプローチは、さらに言えば、ダンスという芸術につながっていくかもしれません。説明しましょう。

3 言動についての価値判断、それに結びついた喜怒哀楽の変化を一時停止して、ただ自然を観察するようにしてみる。そうすると、相手の言っていることも行動も、意味から離れて、ただの動きに、「運動の形」になってくるでしょう。

たとえば会社に、いつも文句ばかり垂れる嫌な上司がいるとして、その人がぶうぶう言うのも、「これはただの動きなのだ」と一歩退いて見てみる。言われたことを、ただ文字通りにそう言っているだけのこととして、録音するように聞く。そうすると、だんだん世界が、ダイナミックな運動の連鎖として立ち現れてくる。動くものが描く線、動きのリズム。リズムの語源である古代ギリシア語の「リュトモス」には「形、形態」という意味があるのですが、意味の理解とは関係なくただ起こっている運動の形＝リズムを捉えるのです。目の前の出来事を、根源的な意味で「世界のダンス」として捉える。何をしているのか（意味）ではなく、動きそのものの面白さを鑑賞する芸術としてのダンスです。ダンスとして日々の出来事を見る。それは、出来事を目的性から解放し、出来事を［　X　］的な運動として見る、ということです。

上司に叱られているのだとして、その意味をいったん棚上げにし、たんに言葉や口調、身体の様子を他人事（ひとごと）のように観察する——というのは離人症（注1）的な感覚ですが、そうやって自分を二重化して、つまり叱られている自分とその自分を退いて見ている自分とが同時にいるような感覚になる。それがおそらく、芸術を作るのに欠かせない感覚です。

踊るということは、動きの自己目的化です。普段私たちは体を目的的に使っている。塩をテーブルの上から取るとか、ドアを開けるというのは何かを達成する目的的な動きですが、そうではなく、ただ体を動かすためだけに動かす。それがダンスです。

こっそり部屋で一人、何のためでもない動きをしてみる。他人に見られたら不審に思われる動きです！（笑）　でも、それが身体を自己目的化する基本的なレッスンで、それはひじょうに抽象的なダンスの発生だと言えます。特定の曲のフリを覚えることとは違う、コンテンポラリーダンスに近い抽象的なダンスになるはずです。意味のないヘンな動きというのは前衛的なものですが、それこそミニマムなダンスなのです。

人間観察を離人症的にやってみて、出来事をただ書いてみることでできる小説というのも一種の前衛小説です。でも、それこそがいちばんミニマムな小説なのです。

小説というと普通は、起承転結があって、エンタメ的にキフク[4]がある物語を思い浮かべるかもしれませんが、エンタメ的な

小説はひとつの形ではあるけれども小説のすべてではありません。そういうストーリーは目的的なものです。だんだん緊張感が高まり、やがて緊張が解消されてカタルシスが起きる、そこを目的として筋を組み立てるというのが基本的な流れです。しかし、そういった目的的な構成をいったん完全にやめてしまうほうが、むしろ、芸術としての文学を自分なりに開始する最短距離の方法なのです。

4

さて、ここで改めて言語について考えることにしましょう。「形」として、リズムとして世界を捉えるというダンス的見方をさらにラディカルに言語そのものに向けると、詩が発生します。

小説は通常、常識的に意味がわかる文で構成されているけれども、ラディカルな現代詩になってくると、常識的な意味伝達はそこでは崩壊して、曖昧なヒユ[5]であったり、言葉のダジャレ的なつながりだったり、言葉自体が持つ物質性とでも言うべきものを操作するようになります。この本では小笠原鳥類(注2)さんの例を挙げました。現代詩では、言葉そのものを「面白い形」として取り扱っていると考えればよいのです。

これまた前衛的で極端な詩の捉え方ですが――詩にはもっと意味的、目的的な書き方もありますが――、前衛的で極端であることこそが、むしろそのジャンルのミニマムな条件を示しているということがここでもまた言えるわけです。しかし、言葉ひとつひとつを物質的に捉えるというのはなかなか難しいことかもしれません。

現代詩は言語が壊れそうになる「やばい」領域に近づきますが、言葉をリズム的に扱うジャンルとしては、俳句や短歌のような定型の短詩がなじみやすいでしょう。五・七・五、五・七・五・七・七というリズムの中で、リズムと意味の両面で遊ぶ。

俳句は、ある場面を瞬間的に切り取るものが多く、その面白さは写真に近いと思います。僕の友人である北大路翼(注3)の句には、絶妙な瞬間を捉えるスナップ写真のような鮮やかさがあります(句集『時の瘡蓋(かさぶた)』などをぜひ読んでみてください)。それに比べて短歌は主観的、心情的な性格が強い。写真は非人間的なカメラアイなのですが、短歌には「私」の物語がある。[C]この章で述べている考え方は俳句寄りかもしれません。

俳句というと「わびさび」というような伝統的な価値観がすぐ出てきますが、この際そういうことは考えなくてよいのです。特定の価値観で判断するのではなく、ただの出来事に立ち会うという態度で、目の前のことをただパシャパシャとスナップを撮るように言葉のリズムに収める。五・七・五というのは、レンズでありフレームです。

逆に、写真を撮るときには俳句的発想で撮ってみればいい。写真を撮るときにも、何か意味を伝えるという発想なしで、ただ、ある形やリズムを切り取ればいいのです。

（千葉雅也『勉強の哲学　来たるべきバカのために　増補版』による）

（注）1　離人症――自分自身の考えや行動などに現実味を感じなくなる精神症状。
2　小笠原鳥類――現代の詩人（一九七七～）。
3　北大路翼――現代の俳人（一九七八～）。

問一　傍線部1～5のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二　傍線部A「アイロニーの過剰」とは、どういうことか、四〇字以内で説明せよ。

問三　傍線部B「さまざまなフィルターをユーモア的に並列させる」とは、どういうことか、四〇字以内で説明せよ。

問四　この文章は［1］～［4］の四つの意味段落に分けられるが、このうち［2］はどのような役割を果たしているか、その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　［1］で示されたアイロニーとユーモアの話題から小説とはどのようなものかという話題へと論点を切り替え、全く新しい視点から考察を進め、その上で［3］で示されるダンスという芸術に関する話題へとつなげる役割。

イ　［1］で示されたアイロニーとユーモアに関する考察を踏まえつつ、小説的に世界を捉えることの難しさを指摘することで、その対比として［3］で示されるダンスとして世界を捉えることの容易さを強調する役割。

ウ　［1］で示されたアイロニーとユーモアの実生活への応用に関する具体例として、芸術としての小説に言及することで筆者の主張を明確にし、加えて［3］で示される芸術としてのダンスに通じる観点をも導き出す役割。

エ　［1］で示されたアイロニーとユーモアという二つの軸について、物事へのそうした見方は小説世界に当てはまるだけでなく、［3］と［4］で示される諸芸術においても普遍的に当てはまることを示唆する役割。

オ　［1］で示されたアイロニーとユーモアの視点を応用して、オリジナルな小説を執筆することの有意義性を述べ、さらに［3］と［4］で示されるダンス的見方が文芸創作と相互補完的な関係にある可能性をほのめかす役割。

問五　空欄［X］に入る適当な語句を本文中より抜き出せ。

問六　傍線部C「この章で述べている考え方」とあるが、「補章」において、筆者は日常の中でどのようにふるまえばよいと考えているか、七〇字以内で説明せよ。

第二問

次の文章は、小池水音「息」の一節である。以下のあらすじを踏まえて、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、表記の一部を改めた）。（60点）

幼いころから姉の環（わたし）とともに喘息を患っていた弟の春彦が、若くして死をえらび、もう十年がたつ。十五年ぶりの喘息発作の再発を機に帰郷した環は、かかりつけ医として、家族に深くかかわっている小川医院を訪れた。その後、医院の娘稜子に、春彦のことでどうしても伝えたいことがあるのだと声をかけられる。左の耳の聞こえが悪い稜子は、右耳を差し出す形で環と向き合い、学生時代につきあっていた春彦との、ある日のできごとを語りはじめる。

「穏やかな一日でした。さっきまでのように晴れ晴れとした天気で、風もさほど強くなく、海を眺めるのにこれ以上なくふさわしい日。わたしがレンタカーを運転してゆきました。カーステレオでは、そのころよく一緒に聞いていた、九〇年代のアメリカのポップスが流れていた。片道だいたい二時間ぐらいの道のりでした。目的の海岸に近づくほどに、カーナビが頼りにならなくなったことを覚えています。車が通れないような細い路地に案内されたり、ナビ上では道がないはずの場所に現在地のピンが留まっていたり。

そうしたとき春彦くんはいつも、他愛のない冗談を言って和ませてくれました。わたしはそんな春彦くんに、当時からずいぶん助けられていた。三歳年下の彼が、大学の同級生や先輩たちよりも、よほど大人びているように感じました。どうしたらこれほど、ひとの内心の変化に気づくことができるんだろう。これほどひとを安心させられる語彙を、いったいどこで身につけたんだろう。そうふしぎにおもっていました」

A おなじように感じたことが何度もあった。六歳も年下の春彦のことを、わたしはむしろ兄のようにおもっていた。酒を飲みすぎた父にわたしが声をあらげた翌朝、晩の様子を父にゆっくりと伝えて、穏やかに反省を促すのが春彦だった。

「どうやら正しい道を見つけることができて、海岸を示す標識が現れるようになりました。それらをたどってゆくと、ほんの直

前までただの住宅地でしかなかった角を抜けたさきに、海めがけてユル[1]やかな曲線を描いて下ってゆく、長い坂が現れました。

坂のうえから海へと向かう景色は、壮観でした。淡く緑がかった海は、分厚い白波を弾けさせながら、いちいち波を引かせるのも煩わしいというように、次々と岸辺に押し寄せていました。

浜辺の手前に駐車場があるようだったので、車で坂を下ってゆきました。古い路面は長く整備されていないようで、凹凸が激しかったのを覚えています。わたしは大きな凹みを避けるため、路面に注意を向けていました。

そのとき、春彦くんが、あ、と言って正面を指差しました。いまの、見た？　どうやら彼は、沖合になにかを見つけたようでした。

『大きな鳥が、海に飛び込んだんだよ』

そう言ってその様子を、両手を使って再現していました。左腕を平らに伸ばして、水平線に見立てる。そして尖(とが)らせた右手の鳥を、水平線の下に飛び込ませるというように。

『……二十九、三十。もう三十秒経つのに、まだあがってこない』

駐車場に停車するころ、彼がそう言いました。彼は坂を下るあいだずっと、海面から目を離さずに、鳥がそこに浮かんでくるのを、秒数をかぞえて待っていたんです」

視線のさきに広がる海。路面の凹凸による揺れ。運転する稜子さんの隣で、そうして手振りをまじえて説明する春彦の姿を想像する。

「魚を求めて水に飛び込んでゆく海鳥を、わたしはＮＨＫの番組かなにかで見たことがありました。それでも、何十秒ものあいだ海に潜ったままでいる鳥は、番組には出てきませんでした。

彼の見た鳥は、ほんのすこし目を離したスキ[2]に海面に浮かび上がり、すでに飛んで行ってしまったのではないか。あるいは、鳥ははじめから海に飛び込んではおらず、むしろくちばしに咥(くわ)えていた魚かなにかが、海に落ちたのではないか。わたしはそのようにおもいました。

けれど彼は、実際に鳥が飛び込むのを見たと、頑として譲りませんでした。鳥が両の羽をたたむようにして流線型になり、そして海めがけて矢のように落下していったのだと。彼はときどき、そんなふうに頑固になるところがありました。自分の目で見たものや、耳で聞いたことは、ちょっとやそっとのことでは曲げないというような。

B 春彦くんがそれほど言うならば、鳥はきっと飛び込んだのだろう。そうおもうことにして、しばらくふたりで一緒に海を見張りました。どちらかは絶えず海を眺めたまま、どちらかがその手を引いて浜辺を歩く。そんなふうにしてしばらくあたりを歩き回りました。いや、もしかすると、まばたきの合間の一瞬のうちに飛び去ってしまうかもしれない。そうどちらかが言い出してからは、打ち捨てられて裏返しになった小舟に腰掛けて、数十秒ごとに交代で、まばたきせずに海を見張ったりもしました。

もちろんそのころにはもう、春彦くんもわたしも、ふざけ半分でした。鳥が浮き上がってくることはないと、内心でわかっていたとおもいます。それでも、ときおり彼の表情を窺[3]うと、ただ意固地になっていることとはちがう、どこか切実な空気を感じました。

わたしにしても、彼がそれほどまでに気にかけるものを見逃してしまったことに対する、残念な思いがありました。せめて鳥が浮かび上がり、どこかへ飛んでゆく姿をちらりとでも見ることができたら、見過ごしてしまったものを取り返すことができるのではないか。そうおもい、海面を見つめていました。

一時間か、それ以上か、わたしたちは海を眺めつづけました。お昼にアジフライのお店に行こうと話していたほかには、とくに予定はありませんでした。冷えてくると車に戻って、フロントガラス越しに正面の海を眺めました。

わたしたちは手をつないでいました。浜辺を歩いていた時間よりも、停まった車のなかでのその時間をよく覚えています。そうしていると、まったくおなじ景色を、ふたりで一対の瞳になって、おなじ気持ちで眺めているのだと、そう感じていられた。あのような時間を過ごして、それで数ヶ月後にはわたしたちが別れてしまったということが、いまではなにか信じられないことのようにおもいます」

彼女はもうこちらに向けて右耳を差し出してはいなかった。C わたしの相槌を必要とせず、ただ宙のある一点に目をやり、そこに流れてくる言葉を逃さず摑まえるのだという真剣な表情で、話をつづけた。

「あの日、鳥が現れるのを待っていたあの時間のことを、わたしはしきりに思い出します。話もしていたはずですが、内容は覚えていません。きっと、ほんの些細なことばかりでした。あのときわたしは、春彦くんになにかを問いかけるべきだったんじゃないか。あるいは、なにか伝えるべきことがあったんじゃないか。いまになってあの時間のことをくりかえしよみがえらせては、そう考えています」

4 稜子さんと春彦というふたつの瞳が、まばたきすら疎んじて、まっすぐに海を見つめている。そこに鳥が浮かびあがる瞬間を待っている。自分自身で長い時間をかけて描いた絵のように、その光景が細部まで思い浮かぶ。

ふたりは昼すぎになると、アジフライの有名な店に行き、定食を食べた。山道を進んださきにある見晴らしのいい高台で、夕景を眺めた。そうしてまたレンタカーに乗り、途中で渋滞につかまりながら、この町へと戻ってきた。

「その日帰りの旅からまもなく、あの震災がありました。春彦くんは大学の入学がひと月遅れて宙づりになり、わたしのほうは国試や卒業論文の準備がはじまった。そうして慌ただしくしている二、三ヶ月のうちに、次第に連絡を取らなくなっていました。あの日、あれだけ辛抱強く眺めた海鳥についても、調べることも、話題にすることもないままに。

最後に一度、喫茶店で会いました。もうこれで終わりなのだという雰囲気を、お互いに感じていたとおもいます。わたしは、春彦くんには誰か好きなひとができたのかもしれないとおもっていました。わたし自身への不満や嫌悪というよりも、一緒にいるときの彼は、なにかうわの空でいるような印象でした。

けれど、わたしはわたしで、彼のその態度を見ていても、腰を据えて話しあおうだとか、あるいは自分への注意を引こうというようには、おもえなかった。そうして曖昧に別れて、わたしにとっては部屋にこもるばかりの日々がはじまった。やがて年が変わって、国試を終えたあとのことでした。春彦くんが亡くなったと、わたしは知人からそう伝え聞きました」

わたしは——彼女はさらにそう言いかけて、けれどそれ以上言葉を継ぐことのないまま、長い時間が過ぎた。やがて両手で

包んだままでいたカップに視線を移すと、彼女はひとつ息をついて、たっぷりと残っているコーヒーに口をつけた。

「あの日のことを思い出すようになって、海鳥について調べてみたんです」

彼女は鞄からスマートフォンを取り出して、その海鳥を画像検索してわたしに見せてくれた。想像していたよりも、鳥はずいぶん大柄であるようだった。

「空高くから海に飛び込んで、そして水中ですこしのあいだ泳ぎさえして、えさを獲る鳥がいるんです。春彦くんが手で示していたように、体長もかなり大きい。ガネットという名前の鳥です。

その鳥の生態を追った、海外のドキュメンタリーを見ました。ガネットは成体になるとえさを求めて飛び回り、魚影を見つけると、そこをめがけて飛び込んでゆく。なるべく速く、なるべく深く潜るため、翼をたたみ、身を細くかためる。そうして、イワシやなにかの魚を獲って水面へと浮き上がり、羽ばたいて巣へと戻ってゆく。

わたしの調べたところでは、ガネットの死因というのは少なくない割合で、飛び込みによって瞳が損傷し、失明してしまうことにあるそうです。ガネットはカテ[5]を得るために飛び込んだ海のなかで光を失い、水面がどちらともわからずに、もがきつづける。おそらくは水を飲み込んで、パニックのままに沈んでいってしまう。もしかするとあの日、春彦くんが目にしたのは、そうしたガネットの一羽だったのではないか。わたしはそう想像しています」

彼女が話を終えたときには、もう夕方になっていた。次第に厚くなった雲によって夕陽はさえぎられ、曖昧に夜が訪れようとしていた。結局、午後のお茶どきになっても客がまばらだった店内は、夕食をまえに、ようやく賑わいを見せていた。

稜子さんは、わたしの両親の様子を尋ねた。元気にやっているようだと、簡潔に答えた。父が歩いているのをときおり見かけると彼女は言った。ずいぶん距離の長いウォーキングをしているのだと話すと、それはとても良い習慣ですよと言って、彼女ははじめてはっきりとした笑みを浮かべた。

「おかあさまが市民ホールで歌っていらっしゃるのも拝見しました」

稜子さんはそうつづけた。たしかに母親は地元の合唱団にはいって、ときおり発表会のようなことをしていた。春彦の友人

の母親たちと一緒にはじめたのだと、何年かまえに聞いたことがあった。合唱団には稜子さんの知り合いも所属していて、いちどクリスマスコンサートを見に行ったことがあるそうだった。わたし、まだ行ったことないんです。そう返すと、それはもったいない、とてもすばらしい合唱だったと、稜子さんはまた微笑んだ。

わたしたちは連絡先を交換して、べつの機会にまた話そうと約束を交わした。これから家に帰り、父の夕食を用意するのだと彼女は言った。そして、長く一方的に話してしまったと詫びた。とんでもない、話を聞くことができてよかったとわたしが言っても、彼女は恐縮した様子を崩さなかった。

レジに向かって歩く稜子さんの後ろ姿を見ているとき、わたしのなかで、このひとと春彦の気があい、恋人としてつき合っていたのだということが、腑に落ちたように感じた。すこし猫背の姿勢や、身にぴたりと沿わせる鞄の持ちかた、あるいはまだ全身のシルエットから、その隣を春彦が歩いている光景が、自然に思い浮かんだ。D そしてその光景はかつてたしかに存在したのだとおもうと、わたしの胸は痛んだ。

問一　傍線部1～5のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに書き改めよ。

問二　傍線部A「おなじように感じたことが何度もあった。」とあるが、この一文の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　環の春彦に対する見方が偏ったものではなく客観的なものであることが表される。
イ　環と稜子二人の春彦に対する理解のしかたに、重なるものがあることが示される。
ウ　姉の環も知らない頑固な面が春彦にあるのを、稜子は見ていたことが強調される。
エ　春彦の穏やかな性格は、頑固な本性の偽りの姿であることがあらわになる。
オ　稜子の春彦に対する愛情が、家族愛的な性質のものであったことが表現される。

問三　傍線部B「春彦くんがそれほど言うならば、鳥はきっと飛び込んだのだろう。そうおもうことにして、しばらくふたりで一緒に海を見張りました。」とあるが、ここには稜子のどのような思いがあるか。八〇字以内で説明せよ。

問四　傍線部C「わたしの相槌を必要とせず、ただ宙のある一点に目をやり、そこに流れてくる言葉を逃さず摑まえるのだという真剣な表情で、話をつづけた。」とあるが、この稜子のようすから読み取れることを説明したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　人に説明するのではなく、自分で自分の思考を言葉にしながら、気持ちを整理しようとする姿。
イ　冷静に人に説明するのを忘れて、自分の世界に没入してしまうほど感情がたかぶっている姿。
ウ　相手の反応を気にする必要もないほど、自分と相手とを同一化させてしまっている集中した姿。
エ　自分自身の記憶をはっきりとした言葉にするのが難しく、目の前の相手を気にする余裕のない姿。
オ　聞き手との対話のコミュニケーションを忘れて、一人がたりをはじめてしまう独りよがりな姿。

問五　波線部「けれど彼は、実際に鳥が飛び込むのを見たと、頑として譲りませんでした。」とあるが、彼が、水中に沈んだ鳥がいたことをこうまで頑固に主張したのはなぜか。その後の、ガネットに関する稜子の言及を含め、推測したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　水中から鳥が浮かんでくることを信じたいが、実は間違いではないかと自分でも自信がなくなってしまったから。
イ　鳥が本当にいてそれが浮かんでくるかどうかは大したことではないけれども、稜子に疑われるのが嫌だったから。
ウ　鳥の姿にわが身を重ねてしまう切実な思いを抱えていて、水中から浮かび上がってくることを信じたかったから。
エ　鳥を見逃した稜子が鳥の存在を疑っていると思い、水中から鳥が浮かんでくることを信じてもらいたかったから。
オ　鳥が、落ちたのではなく自ら水に入った以上、かならず自力で再び浮上してくると無邪気に信じ込んでいたから。

問六　傍線部D「そしてその光景はかつてたしかに存在したのだとおもうと、わたしの胸は痛んだ。」とあるが、どういうことか、一〇〇字以内で説明せよ。

第三問

次の文章は『源氏物語』の一節である。髭黒大将の北の方(母君)は体調を崩していたが、髭黒大将(殿)が新たに玉鬘を妻としたことから、夫婦の不仲は決定的となった。それを聞いた髭黒大将の北の方の父である式部卿宮(宮)が、北の方とその子供たちを白邸に引き取ることにし、息子たちに迎えに行かせた。これを読んで、後の問に答えよ(なお、設問の都合上、原文の表記を一部改めた)。(40点)

君たちは何心もなくて歩きたまふを、A母君みな呼びすゑたまひて、「みづからは、かく心憂き宿世、今は見はてつれば、この世に跡とむべきにもあらず、ともかくもさすらへなん。生ひ先遠うて、さすがに、散りぼひたまはんありさまどもの、悲しうもあべいかな(注2)。姫君は、となるともかうなるとも、おのれに添ひたまへ。なかなか、男君たちは、え避らず参で通ひ見えたてまつらんに、人の心とどめたまふべくもあらず、はしたなうてこそ漂はめ。宮のおはせんほど、型のやうにまじらひをすとも、かの大臣(注3)たちの御心にかかれる世にて、かく心おくべきわたりぞとさすがに知られて、人にもなり立たむこと難し。さりとて山、林にひきつづきまじらむこと、後の世までいみじきこと」と泣きたまふに、みな深き心は思ひわかねど、うち顰(注4)みて泣きおはさうず。「昔物語(注5)などを見るにも、世の常の心ざし深き親だに、時に移ろひ人に従へば、Bおろかにのみこそはなりけれ。まして、型のやうにて、見る(注6)前にだになごりなき心は、懸り所ありてももてないたまはじ」と御乳母どもさし集ひてのたまひ嘆く。

日も暮れ、雪降りぬべき空のけしきも心細う見ゆる夕なり。「いたう荒れはべりなん。早う」と御迎への君達そそのかしきこえて、御目おし拭ひつつながめおはす。姫君は、殿いとかなしうしたてまつりたまふならひに、「見たてまつらではいかでかあらむ、いまなども聞こえで、また逢ひ見ぬやうもこそあれ」と思ほすに、うつぶし臥して、Cえ渡るまじと思ほしたるを、「か

く思したるなん、いと心憂き」などこしらへきこえたまふ。ただ今も渡りたまはなんと待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなんや。常に寄りゐたまふ東面（ひむがしおもて）の柱を人に譲る心地したまふもあはれにて、姫君、檜皮色（ひはだいろ）の紙の重ね、ただいささかに書きて、柱の乾割（ひわ）れたる狭間（はさま）に、笄（かうがい）（注8）の先して押し入れたまふ。

E 今はとて宿離（か）れぬとも馴（な）れきつる真木（注9）の柱はわれを忘るな

えも書きやらで泣きたまふ。母君、「いでや」とて、

F 馴れきとは思ひいづとも何により立ちとまるべき真木の柱ぞ

御前なる人々もさまざまに悲しく、さしも思はぬ木草のもとさへ、恋しからんことと目とどめて、鼻すすりあへり。

（注）1 散りぼひ――落ちぶれさまよい。
2 あべいかな――「あるべきかな」の音便形。
3 かの大臣たちの御心にかかれる世にて、かく心おくべきわたりぞとさすがに知られて――玉鬘の養父である光源氏と、実父である内大臣（かつての頭中将）たちのお心次第の世の中ですから、このように気を許せない一族だとやはり目を付けられて。
4 うち顰みて泣きおはさうず――泣き顔をしていらっしゃる。「おはさふ」は「あり」「をり」の尊敬語で、複数の主語が同じ動作をすることを表す。
5 昔物語――ここでは、継母が継子をいじめる物語のこと。
6 見る前にだになごりなき心は、懸り所ありてももてないたまはじ――今でさえ心残りのない心では、頼りがいがあるようにも扱ってはくださらないだろう。
7 こしらへ――なだめ。
8 笄――髪を掻（か）き上げるのに使う道具。

9　真木の柱――スギやヒノキなどの立派な木で作った柱。

問一　傍線部A「母君」と同じ人物を指している別の語を、文章中から二つ抜き出して答えよ。

問二　傍線部B「おろかに」を現代語訳せよ。

問三　傍線部Cについて、姫君が「え渡るまじ」と思っている理由を説明せよ。

問四　傍線部D「こしらへきこえたまふ」は誰から誰への行為か、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

	誰から	誰へ
ア	鬚黒大将	式部卿宮の息子たち
イ	鬚黒大将	鬚黒大将の北の方の娘
ウ	鬚黒大将の北の方	鬚黒大将の北の方の娘
エ	鬚黒大将の北の方	式部卿宮の息子たち
オ	式部卿宮の息子たち	鬚黒大将の北の方
カ	式部卿宮の息子たち	鬚黒大将の北の方の息子たち

問五　傍線部E、傍線部Fの二首の和歌から読み取れる邸への思いについて、姫君と北の方の心情の違いがわかるように説明せよ。

問六　本文の内容と合致しているものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　北の方は、夫である鬚黒大将につくづく愛想を尽かし、すぐにでも出家しようと決意している。

イ　北の方は、息子たちが貴族社会で一人前になるためには、夫の助力が必要であると考えている。

ウ　北の方は、夫になついている娘は、夫のもとで、新しい母とともに暮らすのがよいと考えている。

エ　乳母たちは、鬚黒大将が世間の父親のように、いずれは子供たちへの愛情を取り戻すと考えている。

オ　迎えに来た式部卿宮の息子たちは、母子たちがなかなか動こうとしないことに業を煮やしている。

第四問

次の文章は『史記』游侠列伝の冒頭である。これを読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、原文の表記を改めた箇所がある）。（40点）

A

韓子曰、「儒以文乱法、而侠以武犯禁。」二者皆譏。

B

而学士多称於世云。至如以術取宰相・卿・大夫、

C

輔翼其世主、功名俱著於春秋、固無可言者。及若

D

季次・原憲、閭巷人也。読書懐独行君子之徳、義不

E

苟合当世、当世亦笑之。故季次・原憲終身空室蓬

F

戸、褐衣疏食不厭。死而已四百余年、而弟子志之

不倦。今游侠、其行雖不軌於正義、然其言必信、其

行必果、已諾必誠、不愛其軀、赴士之阨困。既已存

（注1）（注2）（注3）（注4）（注5）（注6）（注7）（注8）（注9）（注10）（注11）（注12）（注13）

亡死生シ矣、而モ不レ矜ホコラ二其ノ能ヲ一、羞レ伐ほこルヲ二其ノ徳ヲ一。蓋シ亦タ有リ二足レ多トスルニ(注14)者一焉。

(注) 1 韓子――戦国時代の思想家、韓非子のこと。　2 卿・大夫――高位高官の地位の総称。　3 輔翼――たすける。
4 春秋――歴史書。　5 季次・原憲――ともに孔子の弟子。　6 閭巷人――官職に就かず、民間にいる人。
7 独行――高潔な思いを胸に秘め、世俗に左右されないこと。　8 苟合――他人にへつらい迎合すること。
9 空室蓬戸――部屋に家具がないことと、ヨモギで編んだ戸。　10 褐衣疏食――あら布の衣服と粗末な食べ物。
11 志――慕う。　12 阨困――苦しむこと。　13 存亡死生――生きるか死ぬかの危険を冒して他人を救う。
14 多――称賛する。

問一　波線部1と波線部2の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二　傍線部A「韓子曰、『儒以文乱法、而俠以武犯禁。』」について以下の問に答えよ。

①　この文(韓非子が述べた内容)の意味として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　儒者は文章を厳密に読んで、法を厳格に守り、俠客は武芸で禁令を忠実に執行する。

イ　儒者は文学を通じて法を乱し、俠客は軍隊を用いて禁令を周知する。

ウ　儒者は文化的手段で法を改竄(かいざん)し、俠客は兵力で悪しき禁令と闘う。

エ　儒者は文辞を駆使して法を勝手に解釈し、俠客は武力を行使して禁令を破る。

オ　儒者は文筆の才で法の抜け道を探り、俠客は武勇で禁令の不備をつく。

②　この一文の本文全体における役割として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　作者の主張を直接的に述べており、本文全体の結論を先取りしている。

イ　著名な思想家の考えを引用することで、以降の議論の基盤を設定している。

ウ　游俠の行動を正当化し、彼らの社会的意義を積極的に肯定している。

エ　著名な思想家の権威を借りて、儒者と俠客への非難を強調している。

オ　儒者と俠客の対比を通じて社会の矛盾を提示し、両者の功罪を浮き彫りにしている。

問三　傍線部B「学士多称於世」と傍線部C「以術取宰相・卿・大夫」について、ここでの「学士」と「術」の解釈として、最も適当なものを、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　学士は儒学を学んだ知識人で、術は儒学の教えを指す。
イ　学士は儒学の専門家で、術は神秘的な教えを指す。
ウ　学士は兵法を学んだ知識人で、術は戦略を指す。
エ　学士は兵法の専門家で、術は兵法を指す。
オ　学士は法律を学んだ知識人で、術は法律の知識を指す。
カ　学士は法律の専門家で、術は政治的手腕を指す。

問四　傍線部D「義不苟合当世」の書き下し文は「義として当世に苟合せず」となる。この読みをもとに白文に訓点を付けよ。

問五　傍線部E「死而已四百余年、而弟子志之不倦」とあるが、「弟子」たちがこのように慕っているのはなぜか。季次・原憲の生き方や価値観に言及しつつ、一〇〇字以内で説明せよ。

問六　傍線部F「其言必信、其行必果、已諾必誠、不愛其軀、赴士之阨困」を現代語訳せよ。

問七　傍線部G「蓋亦有足多者焉」を、本文全体をふまえた上で、必要な語を補いつつ現代語訳せよ。

国語A　解答用紙（二枚中　その一）

受験番号

得　点

第一問

問一	問二	問三	問四	問五	問六
1					
2					
3					
4					
5					

第二問

問一	問二	問三	問四	問五	問六
1					
2					
3					
4					
5					

国語A　解答用紙　（二枚中　その二）

受験番号

第三問

問一	問二	問三	問四	問五	問六

第四問

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
1	① ヨリ		義不苟合当世			
2	② モ					

A【解答例】

第一問

問一　1　暴　　2　際限　　3　直情的　　4　起伏　　5　比喩

問二　既存の価値観を疑い、根拠は何なのかを問うさまが必要以上に徹底しているということ。

問三　ある特定の価値観から判断を下すことなく、様々な見方で物事を捉えるということ。

問四　ウ

問五　自己目的

問六　日常の出来事を特定の価値観で判断するのではなく、意味の理解とは無関係に、自己目的的なただの動き・形・リズムとして捉えるとよいと考えている。

第二問

問一　1　緩（やかな）　2　隙　3　うかが（う）　4　うと（んじて）　糧

問二　イ

問三　彼が見たというものを私も共有したいが、それがかなわぬことなら、せめて彼の信じるものを信じて一緒に海をながめ見過ごしてしまったものを取り返したいという思い。

問四　ア

問五　ウ

問六　稜子と春彦がお互いを大切に思い理解しようとする誠実さと、二人の似つかわしく寄り添い並び立つすがたが、確かにあったと実感されればされるほど、それが失われたことの切なさが感じられるということ。

第三問

問一　みづから　おのれ

問二　冷淡に

問三　挨拶もせずに家を出て、父にもう二度と会えなくなったら嫌だと思っているから。

問四　ウ

問五　姫君は愛着のある邸を離れがたく思い、北の方は今更この邸にとどまるべきではないと諦めている。

問六　イ

第四問

問一　1　もと（より）　2　いへど（も）

問二　①エ　②イ

問三　ア

問四　義（トシテ）不　苟ー合（セ）当　世（ニ）

三　二　一

問五　季次・原憲は儒学を実践しながらも当世に迎合せず、質素な生活を貫いた。この高潔な生き方と揺るがぬ信念が、物質的成功より精神的価値を重んじる姿勢として時代を超え共感を呼び続けたため。

問六　その言葉には必ず信頼があり、その行動は常に果敢であり、約束したことは必ず誠実に実行し、自分の身体を惜しまず困難に陥った者を助ける。

問七　思うに、儒学を学んだ者と同様、游俠の中にもその行動が正義に反するとはいえ、称賛に値する者がいると言えるだろう。